

升形本

『あい之本』

小田 幸子・井上 愛 校訂

【凡例】

- 1、原本を忠実に翻字した。
- 2、漢字の旧字体は、原則新字体に、片仮名のハ・ニ・ミは平仮名に改めた。
- 3、濁点、振仮名は原本にあるもののみ採用した。
- 4、句読点を適宜付した。原本の「。」印は、「。ママ」とした。
- 5、セリフの引用は「」とし、引用が連続する場合は、「」。
- 6、傍記・補記・注記の類は「」に入れて、校訂者の判断により、しかるべき箇所記した。
- 7、適宜改行した。
- 8、誤字・脱字・衍字の処理について
 - ・原本の誤字はできるだけ原本の形のまま書いて、当該箇所に傍線を引いた後、括弧（ ）内に正しい字を記した。訂正せずに傍線を引いて（ママ）と注記したものもある。本書の場合、誤字なのか訛りなのか判断しにくいことがあり、誤刻と区別するための処置である。
 - ・表示できない漢字は■で表記した後、（ ）にいれて補った。
 - ・脱字があると判断した場合、当該箇所に括弧（ ）に入れて補った。本書は助詞の類を脱していることが多いため、脱字と判断して多めに補ってある。
 - ・衍字には当該箇所に傍線を引き、括弧内に（衍）と注した。

9、判読不能、訂正箇所について。

- ① 空白↓□（空白）、抹消↓□（抹消）、虫損↓□（虫損）とした。
- ② 校訂者が文字を推測した場合。□（空・○）、□（抹・○）、□（虫・○）など。
 - ・ミセケチなど判読可能なものは、当該部分に傍線を引いて示した。
 - ・訂正後の字を傍記している場合は、当該箇所に傍線を引き、右に訂正した字を記入した。
 - ・文字の上に直接訂正している場合は、校訂者が判断して訂正後の字を記した。
- ③ 難読で、校訂者が推測した場合はその文字に傍線を引き括弧内に推測した文字を記入して（○？）とし、文字を推測できない場合は□（？）とした。
- ④ 第一冊「所作付」冒頭に記す曲名目録と本文の対応関係には齟齬があるため（解題参照）、便宜上本文の順番に合わせた「所収曲」を付した。
 - ・翻刻は、外題と賀茂×黒塚（前半）を小田幸子、黒塚（後半）×現在八島と末尾の目録を井上愛が担当し、その後、全体にわたり共同で検討した。解題については、前半の書誌を小田が、後半の古演出関係を井上が執筆したうえで、共同で検討した。

（小田幸子）

3 升形本 『あい之本』

所収曲

かも

老松

ゆみ八幡

白楽天

なにわ

高砂

あま

うのは

竹生嶋

ろふたいこ

ぬへ

うかい

八(鉢)木

三井寺

羅生門

今(金)札

あをひ(の)上

矢嶋

自然居士

あしかり

のもり

ゑひら

うかい

あこき

田村

あま

ぬへ

た、のり

たつた

小塩

井筒

くまさか

ていか

女郎花

にしき、

とをる

うねめ

うき舟

くわうてい

さねもり

源三位

国栖

もみちかり

大江(会)

せつしやう石

せかい

しやり

三輪

道成寺

くろつか

藤戸

百萬

ほうか僧

さねもり

くらま天句(狗)

花月

藤永

かんとん

春永

竹生嶋

はし弁慶

たんふう

ゑほしをり

ふしたいこ

さいきやうざくら

七きおち

とうかんこし

せんじそか

くまでほうくわん

はんごんかう

竹の雪

きふね

けんさい八嶋

【翻刻】

【所作付】

あしかり
 「よのあいしらいの本に有」
 へひら
 にし木、
 田村
 よりまさ
 くろつか
 「よの□（抹消）本にもあり」
 ほうか僧
 藤永
 はし弁慶
 ふしたいこ
 とうかんこし
 くまでほうくわん
 竹雪
 八嶋かたり

せかい　　のり
 しやり
 うねめ　　□□（抹・松風）
 あこき　　とをる
 さねもり　　うき舟
 三三　　道成寺
 ふしと　　百万
 くまでほうくわん　　花月
 かんたん　　春永
 へほしをり　　たんふう
 さいきやう□（虫・さ）くら
 　　　　　　七きをち
 せんしそか
 はんこんかう
 きふね

かも

「かやうに罷出たる物は、かもの明神につかへ申しんしよくの物にて候。それ日本は小国とは申せとも、れいしんあまた地をしめて御座候中にも、当しやの御神は、めくみあらた成御神なれば、さいくゝ所々よりも、袖をつらね、くひすをつき、ひ、に御参なされ候へは、しやとうのまへも、事外にきやかに候。そうして神の御事はあさくゝしくは申さねとも、其神ひうかの国其だけにあまさからせ給ふ。それより、やまとの国かつらきのみねにとびうつり給ふ。又、やましろ国、おたきのかも「に」とひうつらせ給ひ候て、だんしやう「に」かこやひめに「ち」きりをこめ給ひ、そぶなつけ給ひ候て、三人の御子をもうけ給ふ。そぶなつけたまひ、なるいかつちの神となり、かも三どころの明神にいわひ申候。かみかもと申候は、ひかけ山を申候。中かもと申は、たけつの御やしろにて候。下かもと申候は、た、すのみやと申候。ちんはいあまた御座候へとも、今月今日は御田うへの御しんはいにて候。それ「に」付、承候へは、むろの明神のしんしよく当しやへ始御参なされ候間、そうとめ立をよひいたし、みたをうへ、御目にかけうと存候。よしない長物かたり申よりも、まづ案内申と存。「かくやへむいて」「いかにそうとめ立へ申候。早々御出あつて、みたをうへ候へ。其分心得候へくゝ」。さかりはにてかゝるへし。そうとめあふきをひろけてみる。そうとめたちをよびいたす□□（虫・事も）「へつの事てもをりなひ。むろ明神のしんしよく、はしめて参詣なされ候間、みたをうへ

て御目かけうとの御事にて候。「一段と用をしやらします」。[まへかたにかみ山をうとうて出てから、うたいすまし、かんぬしともんたいゆふ(て)からふたいを一返ま(は)る。かたひらのかたをぬく也。つくほうている。]

「いつもはそれかしがをとりますれども、今日はさうとめたちのをんとかやう御座ろ」。「いやく／＼かれないことくかんぬし殿のをんとかやうをしやらします」。「かれないとをしやるほどに、さあらは、それかしか、をとるととりましやう」。「むかふへむいて、あふりをたて、あふきをひろけて、あふき中をつかんで、さあらく／＼」。「まいらせ候く其年のねんこ(ママ)かうは能ねんかうなり、月のかすは十二月、日かすは三百五十八日、春のはしめのたなをろしすくなく□□(虫・とも)、しろかねのはなさき、こかねのみなり、しやくのほたれ、にしゆんのつふ、此よねをかりとり候へは、町に千(まん)そく、せまちに千そく、いわいをさめてこへをあけ」。

うた／＼あひく／＼さうとめ、たうへは(ママ)さうとめ

さうとめ／＼めてたき御田うへに、なわしろにをりたち
かんぬし／＼をりたちてく／＼田うへはさうとめ、かさかうてきしやうそ
女下／＼かさかうてたむならはく／＼「な」をもたをは、うよ(ママ)
やうよ

かん／＼いかにさうとめ、とびをか山に白たまつはきに花のさいた
〔を〕みたるか

女／＼かりヤトをかさねて、さいたるぞ、めてたき
かん／＼さつきのさいうほうと、春のうくいすと

女／＼こへくらへん(ママ)しやう、春のうくいすと
かん下／＼さなへとるとて手をとるぞおかしき

女下／＼とつたらはたいちか、わかい時のならいよ
かん下／＼さなへとるく／＼山たのかけひ、もりにけり

女／＼ひくしめなわに、つゆそか、りたる

かん／＼いかにさうとめ、けしやう文かほしいか

女／＼けしやう文をたむならは、さそなうれしからまし

かん／＼けしやう文を□(も?)つたりと、なに、しやうぞ、みめわる

女／＼つらにくの「男」め、ゆふた事よ、はらたち

かん／＼まことにはらかたつならく／＼は、みつか、みを見さしめ

女／＼なはしろのすみく／＼の水はか、みかは

かん／＼か、みを見たりとも、かを「は」よこれたり

女／＼かをは多これたりとも、おもふ人はもつたり

女／＼いかにさうとめ此国の山く／＼に花のさいたるを見たるか

女／＼けにきつと見たれば、こかねの花もさいたる

かん／＼を□(虫・う)めてたし

女／＼をうめてたや、けにめて「た」かりける

／＼まことにめて「た」かりける、めてたき□□(虫・御田)うへう

／＼(ママ)に、せんしよまんしよのとみふれりく

〔大夫中入ならば、つくり物はやくとるへし〕

老松 よひ出

高砂

よひ出也。しやうそくは、すおふ
きるへし。

ゆみ八幡 まつしや

あま

よひ出。しやうそく、く、り。

白楽天 同

うのは

まつしや

なにわ 同

竹生島 のふ力

〔つきん・水衣・しゆす。□(虫・か)きをこしにさし、出〕。

いろく／＼かたりすましてから、「□□(虫・さて)たから物をおが
ませ申」。わき「見よ」とゆふ。「是か当しやのかきて御さる」。あ
ふきをひろけて、たいこうちのそはへいて、あふきへのせて、是よ
りあとにしやたんへむいて、内、とひらをあけて、「きりく」、り
やうへとひらをあけておかむ。しゆつをふところにいれて出、おか
みしもふて、いんのむすぶまねをする。たちのゐて、「おかまし
らい」とゆふ。たから物を、爰にて、「さらはたから物をおかまし
らりやうか」とゆふ。みな見せてから岩とび申事の候。此よしをう
かかう。さてまひは、ほうかくをまふへし。「さて、いんのむすび、
しゆす□(お?)かむ時分、くり、かんきするていに、くちをうこり
く／＼とうこかす)。

ろふたいこ

わきとつれ立出、ろうよりさきへかしまつてゐる。はんの事を、
わきゆい付。ろうのはんをする。たちをもつて出る。其たちを(「ろ
うの右)わきにをひて、ろうのまへにいる。いろの事ゆふて、わき
へのいて、いかにきもつふゐて、わきへ此由をつくる。いかにも
けわしく、わきの前出てこける。わきいろく／＼の事をゆい付て、わ
きへのゐて、「さてく／＼さんく／＼にしかりやうとおもたか、さほ
とにのふて、あら心やすや」。それからがくやの方へむいて、色
く／＼ゆふ。さて、せいちの女出てから、それをつれ、ろうのみきか
とより、二尺ほどさきにをく。「いまの女をひきたてく」と、う
たいをうとふ時、二のくにて、女をひきたて、ろうへいる。ろ
うの右のほうへ少よつて、太刀のそりをかやいて、かたきぬのかた
をぬいて色く／＼ゆふ也。わきしかる。其時いかにも、しをく／＼とし
てのく。さてたいこを、ち、より下につる。あふきをとりなをいて
ときをうつ。十うつて、「あすのにさしつこう」とゆふ。よくく
大夫をゆいあわせすへし。わきともゆいあわせすへし。

ぬへ

これは、「すさきのとうへ」と、おしへ申候。さて後にわ、か、り
てゆふ也。いろく／＼口伝有。是は、あいあいらいと申也。あいを
かたるやうには、かたらぬ物也。た物かたり也。

うかい
 あいあひしらい、ぬへと同事にかたるへし。 是は、「かわさきのみ
 とうへ」と、をしへやる。ぬへと同事也。

八(鉢)木

はやつ、みにて、はしり出る。しやへり。「きいたか」とゆふ
 (て) 出る。色くの事をふたいの中にてゆふ。二人つれ立出る。
 一人は「はらかいたい」とゆふてはいる。一人はふる、。かたな
 さす。二人ながら、かたきぬのかたをぬく。二人ながら、つへをつ
 き出る。のちに出物と、そはつききる。かたなさいて出る。又三人
 も出る。三人ながらふる、もあり。はしか、りにて、ふる、。又一
 人□(虫・は)してはしら二尺ほどさきにてふる、。一人は大しん
 はしらのさきにてふる、。むしやを見る物は、にかいとうの物にな
 りて、たちを以出る。二人してふる、時は、はしか、りにて。又、
 一人はふたいにてふる、。

三井寺

ゆめあわせする物は、太こうちのそはにいる。大夫、ふたいにて少
 うたひ有て、しやうめんにて、色く有てからかへる。ゆめ合申物、
 能時分に出て、はしか、りにて色くゆふて、してはしら少さきへ

出、ゆめあわせ、のく也。

のふ力、わきとつれ立出て、「扱もくいつもとは申ながら名月し
 やによつて、今夜の月は扱もくのとかておもしろい事かな。「な
 にとおほしめし候ぞ。「今夜の月は」いつもとは申ながら名月しや
 によつて、おもしろい事で御座らぬか。夜長にも御さるほとに、一
 つきこしめして、なくさましられい」。酒を一つつ、もる。「のふ力
 一さし御まい候へ」と、わき方よりゆふ。一天しかいなみをもう。
 まいしもうてから、ほつとたつて、「やあとん」とゆふは。なん
 しや、女物くるひかくるう。やれく是はみたい事しやか。何とし
 てよからうぞ。いやくさりながら、うか、はざるまいか。いそ
 いて此由を申上と存」。わきのそはへよつて、「いかに申上候。女物
 くるひかくると申。ちとおなくさみに御ろうせられまいか」。其時
 かたくきんせいの由ゆう。わきへのいて、「扱く是はみたい事し
 やか、なにとしてよからうぞ。それかしは、せがれの時より人のみ
 よと申事はひとむなし、なみそとゆう事はみたいか、なにとしてよ
 からうぞ。さりながら、女物くるいかくるならば、せはひみちを、
 くつとあけて、こちへくるやうて、こぬやうて、こちへは、な、こ
 ひく」。あふきをひろけて、「おぬもこかれていつらん。舟人もこか
 れいつらん」。ゆうてから、ほつと立て、「やれく夜せんの大こし
 ゆにたべやうて、かねをつきわすれた。かねつかう。「こうく」
 と二つ三つく。「あふきをとりなをし、つく。大夫さ、のはに、うし
 ろをた、く。わきへのいて、「大夫」「なにとてなんしはかねつく
 ぞ。「おふ中く、それかしかつくこそ道理なれ、此寺のかねつく

「くほうし」とゆふ。わき方のそはへいて、ゆう。大夫「かねつくへし」とゆう。

「それに御まち候へ」。ほうしへうか、う時、じうたいしをとる。

「後に」ほつとたつて、「女物くるい、かねをつかうと申、おつつけ御さつて御らふせられ候へ」とゆふてのく也。書物をよくみるへし。いろくしな有。

羅生門 つへをつく

「とれにても、しやへりは、かたきぬのかたをぬき、かたなきす」。

はやつ、みにて、「きいたかく」とゆふて、ふたいを一返まわる。

しやうそくは、しやへり。二人ながら色くゆふへし。一人は、

「おれもいこく、やとへいこ」とゆふてはいる。後物も、色くゆふて、「おれもいこく」とゆふて、「やとへいこ」とゆふて、はいる也。

今(金)札

はやつ、み、是はとくくと出る。しやへり也。

あをひ(の)上

しゆしやくみんよひ出、こひ(ママ) 聖処へつかいにやる。物の

けの事をゆふ。してばしらすきへすこし出て、急ひしり方へ行、してはしら内へ少入て安内の事をゆふ。此ゆう事をふしにてゆふ。わきへ(ママ) 出てから、あいしらい、つるくとそはへよつて、「御つかいにさんして候」。ふしにてゆふへし。わき申は、「そも御つかいと、いかなる物ぞ」とゆふ。あ(を) ひの上の事を申。是は、ことばにてゆふ。あとをふしにて申候。わき、してはしら一尺ほど内にいる時、「小ひしりしやうして、まいりて候」と申上候。いろくゆふてのく也。

矢嶋

長はかまにて。其時大こうちのそはに在る。大夫中入して、扱又してはしらのさきへ少出て、しほやをみまい申。わき少もみぬやうに仕候。「しほやのとかあいて、ふしきな事しや」と、ふしんする。「あたりに人もなひが」とゆふ。わきを見付ていろく有。「もうかうを仰らるゝ」とゆふ。よ一をかたる時は、わきとよくゆいあわせする。あいのかたり大事で御座る。かけきよとみをのや事をゆふ。「は(な)のさきらつくわ仕候」とゆふ。よ一かああ(衍) ふきをいたるところを所望仕候時、かたるへし。

自然居士

かみか、りには、わきよりさきへふるゝ。又下か、りには、わき出

て、わき上面へなをりてから、ふる。下かゝりは、子ひき立、わきしやうめんから出て、本のところへつれてゆく。かみかゝりには、さきへふ□(抹消)れて、こじをよひ出でてのく。わきは、はしかゝりにて、うたいて、子をひきたて、つれてのく。其時、あいしらい、たつ也。

下かゝりにても、かみかゝりにも、小袖よりさきをとをらす。しやうそくは、すをうくゝりはかまにて、してはしら少さきへ出て、ふる。ふれてから、かくやへむいて、ちよしゆの物参たるよしゆふ。「こじ御出候へ」とゆふ。大夫「ふれて有か」とゆふ。「申くふれ申て候。ちよしゆも、くせんくんしゆ仕候」とゆふ。大夫出て、しやうきにこしをかける。かくやへいて、おさなき物をつれ出、はしかゝり大めほど、おさなき物出る。小袖ひたりにかけ、ふしゆ左にもたせ、右にあふきもつ。あひしらいより二尺ほどさきへをく。わき、を(さ)なき物をひつたて行。其ま、ほつとたつて、みあし、あゆみ、「やるまいそく」とゆふ。わき「やうが有」とゆう。「やうがあらはつれてゆかふ迄よ。にかくしひ事しや」と、わきへのいてゆふ。さて、こしへ此由つくほうてゆふ。こしは、「いつく迄」とゆふ。「大津松本迄参つる間、それかし、をつかけ申さう」とゆふて、ほつとたつて、ゆかふとする。大夫「しはらく」とゆふ。其時下にいる。大夫「それかしゆかう」とゆふ。「其義ならば、せつほうかむにならうつる」とゆふ。「けうのせつほう是迄」とゆふ時、手かつしやうの内に小袖をとつて、かたへかける。「それかしもあとをくるめうつる(に)て候」。

をさなき物つれてきてから、ふしゆをあけ、こそてをひろけてをく。小袖よりさきを、わきのとをる也。よく大夫ともわきとも、ゆいあわせする也。

あしかり

たいこうちのそはに在る。「ところの物」とよひ出す。わきの方より、くさかの左(衛)門殿の事をとつ。「それは二三ヶ年さきに出られたる」とゆふ。又、太こうちのそはへ行。其由上ろうにとつ。「さぬせん物」とよふ也。出て「なににても、おもしろき物を見せくれよ」とゆふ。そこで、あんして、「されは、へちにおもしろ)き物もなく候か、あしうるをのこの候」由をゆふ。かくやへむいて、「いつものことく、をもしろうあしをうるてあしをうられ候へ」ゆふ。又、わきへのいっている。ゑほしひた、れの事をゆふ。ゑほし□(抹消)ひた、れきるまに、いろくゆふて、「左(衛)門殿いそき御出候へ」とゆふてからのく也。

のもり よひ出。

ゑひら かたるも有、よひ出も有。 女郎花 よひ出。

うかい かたる。 □□(抹・松風)よひ出 同にしき、

あこぎ よひ出。 とをる かたるも有、又よひ出すも有。

田村 同 うねめ よひ出す

〔をく^レに有〕□□〔抹・さねもり〕かたるへし〕〔□□〔抹〕出て
ふる。後にも□□〔抹・ふる。〕〕

うき舟 同

あま よひ出 くわうてい ゆひをさして、「ちやふ

ん」とゆふてから、ゆひをさしてかたる。かたりあけてからも、ゆひをさす。又、「ちやふんく」とゆふ也。いろく口伝有。すなはち、のふよりさきへ出てかたる。是を物おきとゆふ。

ぬへ かたる

たゝのり よひ出

たつた 同

小塩 同

井筒 かたる

くまさか 同

ていか よひ出

さねもり 〔わきしやうきへこしをかけて〕。

わきあふきをなをすと出て、ふる。又かたりあけて後に、「ゆけう上人此所へ御下向候て、さねもりの御あとをおとふらいなされ候間、みなく御参候へ。」とふれてのく也。かたるあい也。

源三位 〔かゝりて、見付かたるへし〕。

国栖

弓と矢と以出る也。かたきぬのかたをぬく也。又一人は、やりを以(持)出る。

もみちかり

女出て、つくり物の右のかとにいる。是持のたちもちよひ出す時出て、あいしらいてから、又のいてる。さて、まつしや出てかたる。太刀持て出る。此たちは是持のひたりにをいてから、「其分心得候へ」とゆふてのく也。

大江(会)

おもては、とびの面がよし。してがた、又惣の物、ふたいをうとうてまはる也。うたいの内に、「たんかう」とゆふ時、惣物うつふきうなつく也。

せつしやう石

ほつすをかたけて出る。たれをゆい付て出る。わきなすの、はらへつゐてから、してはしら一間程をき、はしか、りにて、「ありや」とゆふ。わきか、あいしし(衍)らいをしかる。「さてくふしきな事か御座る。あのかんが一村参と存て御座れ、あの石のそはへ参と存て御されは、ほつたりくとをちて御ざる。あれを以参まして、はんの(「おひじの」)おしるにいたす(ママ)ましやう」とゆふ。わき、しかる也。扱、せつしやうせきの事と。かたる也。

せかい

のふりき、木のゑたになりとも、又竹のゑたになりとも、ふみをゆい付て出る。してはしらのさきへ、一二尺ほど出て、りやうの手に持ち、さきへ少さし出、かたる。一返ふたいをまわる。ゆいあけてから、又まへかとの(衍)ところにてかたる也。ふれてはいる。

しやり
のふりき

〔とひらをあけてみせる也〕。

まへかとは色くゆふて、あいしらい有て、大こうちのはにいろしやりをとつてはいると、こけいづる。とこのそはへ、ころりくとこけ出。しやりてんを見付、きも〔を〕けし、さて僧にふしんする。さて、かたる也。

しやりをとつて、してはしらのそはや(ママ)ゆくと其ま、こけ出る也。さてかたりあけてから、しゆ(ず)とり出、しやりてんへむいてしゆすをすり、「南無いたてん」とゆふて、しゆ(ず)をする也。

三輪

其ま、たつ。宮へ参道すから明神いわれかたる。一返まわりてから明神へ付、つくほうておかむ。衣を見付、いかにもふしんそうにみ

て、かへる。僧方へ参、かたるへし。

道成寺

「二人なからのふ力。一人はわきへこけかゝりて、かねのをちたよしゆふ」。

「たれかある」とゆふて、かねの事を言付也。のふ力二人出、一人あと也。是はさきを持。かねをしゆるうへあけてから、ふへふきまへに、してかたは、いる。あとは、太こうちのまへにいる。大夫とあいしらい言てから、又たいこうちのそはにいる。かね、をつるよりはやく、「くわはらく」と言て一人は、ふたいの方へこけ出、一人あとは、はしかゝり方へこけ出、両方をきあかり、いろく言てから、ふたいしてはしら二尺ほどさきにて、二人ながら、はたと行相、わきへのきて、はしかゝりへ行、二人ながら色く言て、かねをいろうて「あついで」とゆふ。み、へをにきる。「われゆけ人ゆけ」とたかににじきあり。わきの方へはしりかゝり、かねのをちたる事言ま□（？）に、してかた、かねをしゆるうへあけたるやうた言。女人かたくきんせいの由をゆい付。是わきへのいてふる、也。

くろつか のふ力

わきとつれ立出。ふへふきのまへにいる。大夫、「わらわのねややし御らん候な」と言て、はしかゝり、大め程ゆくと、ほつとたつて、

してはしらのさきへ少出て、「あるしのねやをなみそと申たことのはすへかふしきな」。此由ほうしへうかゝい申。ふへふきのさきにつくほうてゆふ。「申あるしの女しよ上らうの身として夜中にたき、をこりにいてられて候が、ことはのすへがふしきに候間、ちと見てまいりましやうか」と言て、ほつとたと、する。わきしかる。此ほつとたと、するをわきのしてによつて、二度する物も有。又三

度仕候も有。但ゆいやわせ次第に仕候。わきの方より「扱なんしもそれにてまろゝみ候へ」と言。其時少まろゝむ也。わきのほうへ、しりめづかいして、そつとひぎをたて、たと、くする。わきみて、しかる。爰所を二度にても三度にてもゆいやわせ仕候。わきしかる時「かしまつた」とゆふて、とゞする。又ねる。扱二度ほとすきてから、い□（虫・か）にもそつとのいて、「さてくきうくつにあつた事かな。してはしらのさき少出てから色くの事言」。

「あるしのねやをなみそといわれたか、ふしきな事しや。それかしせかれの時よりも人のなみそとゆふ事がみだし、みよとゆふ事がみとむない事しや」。さて、□（抹・戸）ひら少あけてみよとする時、又わきへのいて、はなをふさき、てをあて、「くさい」とゆふ。又ねやをつくりと見る。はしめ「は」とひらを少あけて、後にはみなあけてみてから、きもをつふいて「こわい事かな。さてく、ねやをなみそと申たこそとうりなれ。此由まつ申上」。ゆふて、其ま、そはへはし（り）かゝりて、こけて、ねやのやうたいゆふ。「いそいてのかしられい」とゆふ也。口伝有。立てゆふ事は二度なり。してはしら少さきへ出、（ママ）しやへるへし。

藤戸 長はかま

「御前に候」○(ママ)そしやうゆい付て「かしこまつて候」。してはしらすさきへ出、「みなく承候へ。此島の御ぬし、さ、きの三郎殿今日吉日を以、御にうふなされ候間、なににてもそしやうの事は、罷出申せとの御事にてある間、みなく其分心得候へく」。

「ふれてのいてゐる。い所太こう□(ち?)きわ」

「いかにたれか有」御前に候「まつくしたくへか(へ)し候へ」とゆい付。「かしこまつて候」。「やらいたはしの事や。まつた、しられい。こなたのなけきは尤て御さる。去ながら、わたくしもなみたをなかにて御さる。まことに鳥るいちくるいたにも、おやこのわかれとかなしみまするに、こなたのなけきは尤て御さる。まつしたくへかへらしられいや。あらいたはしい事かな」。さてまくをおろす迄、はしか、り大めほとまで「いてからみ」おくりて、そこにいるそ(れ)よりかへる。わきの方へ行て、「た、いまの女を(ママ)有様を見て、我等こときの物迄もなみたをなかにて御座る」。是をしてはしらすさ「き」にて言てから、此由を申上。「いかに申上候。只今の女をしたくへおくり申て御座る。なんほういたはしき事御座る」。「しかく」。此物のあとを「うらくく」一七日とむらいの事ゆい付。又、「当うら」ともゆふ。てんこと同事。くわけんの道具ゆいあける(候)て「あれを申せとも、是を申せともなるまいとおをせらるゝ。まことにそれかしはぶちやうはう物て御座る程に、尤はやなりませすまい。又くわけん過でのちには、おさかもりなどは

御さらませすまいか」(有由ゆふ)「其義で御さるならば、大きかつきを以、五はいも十はいもくたされて、舟そこにとつく(て)ねまらして、いひきのやくを仕まじやう」。「一たんと(な)んしにはにやい申て候」。「かしこまつて候」。ほつとたつて、「みなく承候へ。彼物御あとをくわけんかうを以て御とむらいなされ候間、当うらにをきて一七日か間せつしやうをもやめられ候へ。くわけんのやくしやも、いかにもきれい(に)出立、早々御出候へ。其分心得候へく」。

百萬

「御前に候。いにしへ上(?)はおもしろ事あまた御座候へとも、いまほとは、うちたへて御座候間、しやうしんのおなく(さ)みになにかな御目かけ申たい事しや。爰に百万と申て女物くるい候か、おもしろくるい候間、是を御目かけ申さうつるにて候」。

「ふし、太」南無しやかむにむく」。「同」南無しやか、しやかく」。「太」南無しやかく」を四つ五つほとゆふてから、大夫おそく候へは、「なもふた」同く」。又是三返なりとも五返なりともゆふへし。是はじうたいにいわする也。おなしくとかき付たるふん、ひよしをふむ也。ふたいの中ほとにて、「さはみさあく」とゆふて、あとへよる。大夫、大つ、みのさきへ、二尺ほどまへにて、さ、のほにてた、く。「やあはちかさいた」とゆふ。「太」あらわるのおんとうや。わらはおんととろう」とゆふ。「さ

あらはおんと御とりあろうつる」とゆふてのく也。

ほうか僧

ともをして、ふへふきのまへに「な」をる。たちを持って出。してはしら(ママ)、してはしらの本より大夫まねく。ほつと立。＼「やあ」とゆふて、名みやうしとう。「ほうあれの」。大夫、「ひん舟にのせて(ママ)」、ゆふ。「のふ、そなたのなは、なにとゆふぞ」。「ふうんりうすい」とゆふ。して、まひとり、なをとう。ふたりの名をとて「舟のせる事はならぬ」「しかく」「いや、ふうんしやとおもやれ」。して「そなたはなんぞ」。(ママ)「ほうかしや」。して「かのいろくきよくをする物か」。(ママ)「おふ中く」とゆふ。此由を、のふとしにゆふ。「其義ならはのせい」とゆふ。其時「舟にのりやれ」とゆふ。さて、うちは、色くくの物をわきとてから、大夫「きつてさんたんす」とゆふ。わきにかたなにてをかくる時、「のふ、かなしやのふ」とゆふ。わきをきや(ろ)うとする。(ママ)「なにをさわくぞ」と、あいしらい、色くくゆふ。「おかし人の心やく」とうたいをうとふ時、ほつとたつて「そちかをかしけりや、こちもおかしまて。又、しらは、とはせたいぞ」とゆふ時、「そちかしらにや、こちもしらぬまて」。ゆふてのく也。

さねもり

「下か、り」わき出、大神はしらへゆきて、あふきをなをすと、其ま、立て、ふる、也。又かみか、りには、わきまくの内にいる時出、ふる、也。

扱下か、りも上か、りも、後のしなはお(な)し事。中入有から出上人ひとり事仰らる、由をゆふて、かゝる。かたりあけて、さねもりのあとをいけのみきわにて御とふらいのよしを、立ふる、也。

くらま天句(狗)のふ力

わきと出、文を持、はしか、りの中ほとにて「西谷の花今を盛にて候間ちこ若衆立を御共なされ、御出あれとの御事にて候」。「まいろうつる由申候へ」「かしこまつて候。こなたへ御入候へ」。たいこうちのそはに在る。わきゆい付、「のふ力き(ママ)一さしまい候へ」。一天しかいなみもふ。まいしまふと、大夫うしろへきて在る。是を見付て少わきへのいて「やらふしきな事か有。いま、てなかつたかすみかしらかある。えい、すみかしらかとおもふたれば、すみかしらかとおもふたれば(衍)、客僧かいらる、。此由を急て申上」。「いかに申候。あれにすみかしらかと存て御され、すみかしらではのふて客僧か、つくりとしていらる、。あれをひつたて、やりましやう」「とゆふてほつと立」。「いやく、此所は源平両家のちまたにて候間、みなく御立候へ(とゆふ)。「ひつたて、やりましやう

物。「わき立とあとにて」「さてく／＼にかく／＼しい事がある。ゆるりと酉(酒)をのみ、花などを見物いたいてなくさもふとおもふたれは、此用(様)な、さかもりのざしきをさますわこりよのやうな人には、此にしがらをはたちはかり「を」まらせいてな。たちてこふしをにきりゆふ。

又後のあいしらいは、このは天句(狗)になりて、つへをつき、そはつききて出、「きいたかく」とゆふ。出て、みな物、けいこに「大しん」はしらときりやうて、一人／＼はいる也。「しやうなをう殿御出有、兵法を御つかい候へ。其分心得候へ／＼」ゆふ。「かやうのさかもりのさかもりの(衍)さしきをさまし候間、ひつたて申さう」とゆふて、ほつと立。「みな／＼かへろう」とゆふ

花月

わきとつれ立出、太こうちのまへに入。わきよひ出、「おもしろき物を見せてたまはり候へ」。いろ／＼ゆうて、かくやへむいてよひ出。大夫してはしら過てからたつて、「ちしゆのくせまい、こうたをうとふて、なくさましらしい」とゆふてからたつて、あふきをひろけて「こしかたより」とあいしらいか、うとふ。大夫てをなげかけてふたいをまわる。其時してはしらのさきにて、あしひやうし三つ。又めつけはしらに、ひやうし三つ。大しんはしらにて、ひやうし三つふんて、又本の處にて大夫つきたをす。ほつとたつて、「やら是成木には目が有よ。目かとおもへは、うくゐすか。らつくわらうせ

き仕、つふて、うちころいてやる。かたきぬのかたをぬいて「弓をいよ」とゆふ。色／＼ゆふてのく。「いにしへのち、の左衛門にて有か。見わすれて有か」とゆふ時、ほつとたつて、いろ／＼有て、かつこをつくるとき、大夫ほされぬ用に色／＼ゆふてのく也。

藤永

〔藤永のともをして太刀を以出、其時いろ／＼ゆふてのく也〕

〔のふ力〕又なる(お)のともして出、「さらは一さしまい候へ」とゆふ。一天四かいなみをもふ。大夫、しねんこしのくせまいもふ。「りやうとけきしうと申も、此御世よりおこれり」とゆい、しもふと其ま、たつて、「又きみのおからかさを、れうとけきしうとかたけて我等もともに参けり」とゆふて、まいしうと、さいみやうしよふ。色／＼ゆふ。此由を藤永殿にゆふ。さいみやうしへ、藤永いのかちうつしにゆう。又わき「いそいてまへ、みやう」とゆふ。其時「をのしは、あまりな事をゆふ物しや。みかま、ならば、此にしたらをはたちはかりをまらせいてなあ」ゆふ。のく也。

かんたん

女に(い)てたち。そはつききる也。まへのほうを、いとにてとつる。まくらをた(か)かへ出、ひたりにして(以)、はしらより少さきへ出て、色／＼かたる。「まくらをとこのうへ、しやうめんをく)。扱たいこうちのそはへゆ(き)ている。大夫案内をゆふ。

「先をこしをめされ候へ」とゆふて、こしをかけさず。大夫よりすこしさきへ出て、つくまいて大夫と色く言てのく。さて、がく過てから、いかにもつがいのぬけぬ用につるくへ行て、あふきにてゆかをた、いて「いかにたひ人、おひるなり候へ。あわのう〔く〕こ出き候」と言てのく也。

〔がく過て、大夫ねるをた、く〕

春永

しやうそくは、かたきぬ。く、りきる也

たか(は)し殿とつれ立出。太刀もつて出、さてわきなをると、わきのひたりのかたにたちをおく也。「いかにたか(ママ)れかある」。

「御まへに候」。めしうとの事かたくゆいつける。又たねなを出て、小太郎案内をこう。其時出て、色くつかいをして、わきとたねなをへつかいする。さて太刀かたな、あつかる。それをひたりにもち、又「小太郎がかたなも、をこせい」と言。いかにもぶちやうほうにゆふ。小太郎をこさぬ。其時きつくしかり、かたなをとる。太刀ぬき、せいはいする内〔に〕はやうちくる。いのちたすかる。其あつかる太刀かたなを、しうたいのまへにをく。わき「いかにたれかある。いそきたちかたなをかへし候へ」とゆふ。「かしこまつた」と言てから、たちかたなをわたしてから「いたはしき事かな」と色くゆふ也。たちかたなを参て、太こうち所〔に〕たねいる。「たちをまいらせい」とゆふとき、「えほしひたたれめされ、いそき御まいり候へと申候へ」とわきゆい付〔る〕。其時たちかたなをもち、たねなを

にたちをまいらせ候とき、わきのくちうつしにゆふて、さてしてはしらのさきへ出て、いろくめてたき事をゆふてから、「たねなをいそき御出候へ」とゆふ。えほしひた、れきる内にいろくゆふ也。

竹生嶋

のふ力。らいしやうにて出る

いろくかたり言てから、かきをこしにさし出る。さてしんかへれいをゆふて「たから物をおかませ申さう」とゆふ。わき「みよ」とゆふ。其時「先是か当しまのかきて御さる」。あふきにのせてみせる。しやうめんへうしろむいて、しやたんとひらをあげる。「ことくきりく」、りやうへあけて、さておかみてから、しゆず、ふところに入て出、おかみしもうてから、いんをむすふまねをする。たちのいて「さらはおかましられい」とゆふ。さてたから物をもせらる。みなことくくおかせ〔て〕から「此所に岩とひと申事の候」。此由をうかかう。さてまいはほうかくをまふへし。つめは、

「くつさべ。ごとく」と言てはいる。

はしめにかきをみせてから、とひらをあけて、いんをむすひ、しゆす、五返んも三返んもくり、かんきするていに、くちをうこりうこ(く)とこうこかす。さてたから物を見せる也。

はし弁慶

つるめそなり

きよ(う)けんし二人、あひしらい。たいこうちのまへにいる。し

やうそくは、つきん・水衣きて、水をけを、わいかけにして、はしり出る。一返んまわる。ふたいの中ほとにてこける。あとのあひしらいは、なになりとも(さ)きのこけたる物をひきたて、いろくゆふてのく也。二人して、はやつ、みにて出る。いかにもきもをつふいて出る。扱後に「やれ、をれもつれていてくれ。やれく」とゆふてはいるもあり。

たんふう

〔わきに太刀あり。しかいをよくかくす也〕

たちをもちていつる。扱、僧よひいたす。わきへとりつきいろくする。僧か人をあやめのく。其後

系ほしをり

はしめ出る物は竹馬にのりてふる、也。ふたい一返まわる。書物とよく見合る也。三人成共五人なりとも出る也。してかたは、こしにくしり・ひつしき付て出る。のこぎりもさいて出物も有。のほりはしをかたけて出物も有。ほそひきもちて出物も有。まへかたにはしか、りに〔て〕色くゆうて、してかたは、くしりをさいて出、のほりはしにほそひきをゆい付て、ほりをなけわたし、みなくはしをわたる。はしのこをふまへはいもてわたる。わたりすまいて、やしりきり、かべゑ水をかくるまねして、つちをおとし、あとに在る物にやる。其間やしりきるあひた、みなの手まねきする。くしり

にて、かべつちをおとす也。ひつしきを下にしき、つちをいる、。是を次第くにやる。すつる也。ほりにゆきか、りてから、ほそひきに石をゆい付てなけこむ。ほりのふかさみる也。ほそひきをはしに付□□(抹)て、はしをなけわたす時、はしのはしをふまへてなけわたす。

みな物こしにぬ〔す〕人の道具さいて出る。扱かたにて、かべしたじ〔の竹を〕きる。さて、まはしらにゆきあたり、てにてほん(ママ)をとる。是をのこきりにてひききる。いごかいてみる。ひざをなをいてはしらをひきぬく。てまねきて、あとな物にやる。さてかたなのさきへ、ひつしきのかはをゆい付て、内を人のみる用(様)にしてあちへさし出、こちへさし出、さてしてはしらのきわにて、とうらんよりひうちつけたけ取出て、火をうつまねして、たいまつに火付、さし出、してかた是を取、うちへなけこむ。牛若殿、たちをぬき、いまのたいまつをなけこむ。牛若殿きりとす。

たいまつなけ用(様)、はしめのをたて、なける。二のたいまつをひざへなけつくる。是をあしにてふみけす。三はんめのたいまつを、おびしより、五すんはかりうへ、なけつける。是を牛若殿ひたりの手にてとつて、こちへなけかへす。其時牛若殿、たちのさやにてきやうけんしをきる。「やう(ママ)かなしやう(ママ)」とゆふてふしころひ、こけるを、二人してりやうのてをかたにかけてはいる。一人は其物のあしをもち、して、かいてはいる。してかたを、

□□□(三字空白)

いろく口伝有。たいまつをもつて出る物もあり。ひうちい(し)

をう(ママ)もつて出る物も有。はしをかたけて出る物も有。ほそひきもつて出物も有。人を、く候は、いかほとも出る也。さて此物ともぬす人なれば、ぬす人のなりをして出る。いろくすきんきる也。いろくさまくのていをして出る也。のこきりは、いたにやきはをやき、さいて出る。

ふしたいこ

わきとつれ立、出る。たいこうちのまへにいる。わきのよひいたす。ゆい付るも有。又ゆい付ぬも有。両のつかいする也。

やうきやうやくい

わきとつれ立。わきよひ出、花見きんせいゆい付る。大夫きて、あいら「い」をよひ出、此由わきへゆう。しやうめんの方へむいて、とひらをひらく。「こなたへ」とゆうてのく也。

七きおち

わきよひ出、舟を出せとゆう。ふねを大つ、みうちのまへにをくも有。ふへふきのさきへをく有。大夫とよくゆいやはせする也。大夫とわきと色く言て、かたなにてをかくるとき、わきの方へてをかて「しはらく」と言て、いろくしなをしてのく也。

とうかんこし

〔是はしねんこしでし也〕

わきとつれ立出る。たいこうちの本いる。わきよひ出て「おもしろき物あらは、みせてたまはれ」と言。かくやへむいて、こしをよひ出てのく也。其ま、一せいうち出す。あいしらいわぬさきに、つ、みなとうち候へは、きやうけんしよりつ、みうちへ、はちをあたゆる也。

せんじそか のふ力

ぜんじほうとつれ立出る。た、こ(み)たひ、わきのそはに有。此上、なこまとうのとひらをひらく。のく也

くまてほうくわん

此間にはなすの与一をかたるへし。

はんごんかう のふ力也

つくり物ふたいのさきな(ママ)中にをく。大夫いて、「やとかる」と言。ていしゆへゆいつく也。後にしかいを(の)事をゆい付る。はしめにふ(た)いに小袖有。いろくかたりをゆうてから小

袖を（い）たきて、いかにもをもたそうにいたきてはいる。「しがいをおくり申候」と言てから、わき「かうはんを出せ」と言。「心得候」とゆうてのく。内よりかうはんもつていつる。ふたいの中ほとにをく。大夫とよくゆいやわせする也

竹の雪

かつらをかけて女にてたち出、たいこうちのまへにいる。わきよひ出、いて、色く言て、大しんはしらの本へゆきている。わきはいると、又月わかをしかる。いろく言てから、きよ（う）けんしをよひ出、ゆい付る。月わかよひにゆく。きたりたるよしゆふ。きたりてからいろくしかり、言てのく也。二人してあいしらいする也。

きふね

大夫、ふたいのしやうめんにておかみきねんする。てをあわせおかむ。うたいはて、から、たつてかたる。さて大夫下向すると、ふたいの中ほとにてゆきやい、いろく言てから、たいこうちのそはへゆきている。せいめいよひ出。「御まへ候」と言てたつ。「心得た」と言、がくやへはいる。たんをしやうめんをく。たなの竹のかつ、なに、ても月のかつをく。十二月、又うるいがあれば十三かく。書物とよく見合出也。

けんさい八嶋

「当うらの物」とよひ出、「当浦物」とこたへ申也。

扱も八嶋（の）かせん、けふは日暮ぬる。あすのいくさとさため、ひきしりそく処、をきの方よりも、しんしやうにかさつたる小舟に、十七八のけいせい、やなきのいつ、かさねに、ちしうのはかまふみく、み、つまくれないに日□（虫）たるあふきをはさんてさしあけくかにむかいてこがせける。いそきはちかく成しかは、舟をよこにひかへ、是あそはせとそまねきける。ほうくわんことう兵衛さねもとをめされ、「やあ、あれはいかに」と御状有。真元うけたまはつて「さん候。あれあれはいよとの事にもや候らん。去ながら、大しやうくん、や（お）もてにす、んで御らんせんところて、たれねろふて、いをとし申さんとはかり事にもや「候らん」と申せは、ほうくわん「扱身方に、いつべき物たれかある」「さん候。御身方において、あまた候中にも、下つけの国の住人、なすの太郎助高が子に、与一□（抹・助）宗高とて、小ひやうに候へとも手しやうすにて、かけとりなどを仕候に、三つに二つはかならず、いわうせ候」と申せは、ほうくわん「さあらは与一をめせ」とめされしに、年比はたちはかりののこなるか、かちんにあか地のにしきのひた、れをき、かふとをぬいて、たかひほにかけ、ほうくはんの御前に参る。ほうくはん御らんして「いかに与一。あのけいせいのたてたるあふきのまん申いて、平家に見物させい、与一。「えい、さん候。いまたかやうのふん物仕たる事も候はず。一しやう仕ろふつる

ともからにおふせ被□(虫)ひやうや」と申せは、ほうくわん大き
にいきり「今度かまくらをいて、此じんへ共したらんつるさふらい、
よしつねがめいをそむくへからず。それにしさいをそんせぬともか
らは、いそきかまくらへ出候ておかゑりそへ。後日にかまくらにて
さた申へし」と、いきりたもふ。与一、じし申あしかりなんと存、
「つかまつるうつる事、ふしやうには候へとも、仕てこそみそうら
はめ」とほうくはんの御前を罷立。

其比なすの小さくると、きこうる名馬に、まるほやすつたる金ふく
りんのくらしかせ、わか身かるけにゆらりととり、いそへむいてそ
あゆませける。御前の人々も、只今の若物こそ、一しやう仕ろふつ
るともからとこそ申されける。ほうくわんもたのもしけにて、みた
もふ。

かくて「少」やころとをければ、うみへさつふと打入、馬のふとは
らひたすほとこそ見へにける。ころは三月十八日鳥(酉)の一天の
事なりしに、折節北風はけしうふき、舟はちいさし、なみは高。う
いつしすんつ、うきぬしつみぬ見へければ、あふきも「さ」たかな
らず。与一めをふさき「南無きみやう八まん。なすはゆうせん大明
神。た、いまのあふきのまん申いさせてたべ。是いそんつる物なら
は、弓きりをつてうみに入、このま、しかいし、ふた、ひ本国へか
へるへからず。いま一度本国へかへさんとおほしめさは、此矢はつ
させた(ま)ふな」とふかくきせいし、とんくり目にひらきみれば、
風も少ふきよはり、あふきもいよけにみへにける。与一小ひやうと
いふしやう、十二そく三つふせとつてからりとうちつかい、よつひ

いてはなつ。あやまたすあふきのかなめきは一すんはかり上を、ひ
ふつといきつて、かぶらはうみに入は、あふきはそらにあかり、春
風にひともみふたもみもまれ、うみへさつふと入。つまくれなにい
日出したるあふきが、白なみのうへにうきぬしつみぬ、「い」つし
つんつ、うきぬしつみぬみへければ、た、さなから、こうやうのち
りうきたるにことならず。平家にはふなはたをた、き、「いたりや、
おのこ」とかんつれば、源氏にはゑひらをた、き「いたりや、むね
たか」とかんつる。ほうくわんあまりのうれしさに「やあ、其与一
をおくのまへつれていて、ち、をすはせい、ゑい／＼。しい／＼は
い／＼はい／＼」とゆうて、馬にのりたる心もちして、かくやへか
けはいる也。よく／＼い、合して、いつへからず。

康章

書画(朱印)

「能目録」

■ (斑) 女

黒塚

自然 (居) 士

芦荊

ひつし

氷室

愛寿忠信

安宅

舟弁慶

すゝき

かねもと

三井寺

賀茂

鉢木

もち月

しやつきやう

高砂

山女 (姥)

道明寺

志賀

野宮

東北 (岸) 居士

せ□ (抹消) いをうほう

瀧つ田

兼平

当麻

かつらき

定家

岩舟

江ノ嶋

仏原

源氏供養

車僧

小かち

大佛供養 をくにも有

大六天

めかり

禪師そか

さしやう ほうかく

りやう (この二行意味不明)

飛雲

うのまつり

俊寛

文字 (覚)

盛久

難波

天鼓

松風

三輪

とう舟

道成寺

はころも

大佛供養

梅かえ

ひはり山

楊貴妃

ほうか僧

舟弁慶

小油 (袖) そか

ともなが

芭蕉

鶏立田

浦かへ

錦戸

盛久

行家

【解題】

本稿は、鴻山文庫が所蔵する間狂言伝書、升形本「あい之本」付能目録二冊（『鴻山文庫能楽資料解題 下』第十一章狂言・五〇「間狂言14」）の翻刻である。流派ならびに成立年代は不詳ながら、江戸初期以前の内容を持つと推測され、まとまった間狂言伝書として、寛永十六年の奥書を有する『大藏虎清間・風流伝書』（同上「間狂言1」。能楽資料叢書1「大藏虎清間・風流伝書」に翻刻）と並び、最古の部類に属する。

本来無題の書だが、ほぼ正方形の特色ある形態を有することから、升形本「あい之本」と仮称されてきた。升形の能楽関係伝書は他に類例が無く、古風な印象を与える。全二冊の内訳は、間狂言の所作を記した一冊（『所作付』と、能曲名を目録風に記した一冊（『能目録』）で、二冊を一括して栗色の帙に入れる（帙は候補）。二冊は内容としては別種だが、原本はともに仮綴で、形態が近似し、一体の伝書であったと推測される。翻刻にあたって、あらためて、従来の仮称を書名として採用し、二冊の書名を『升形本あい之本』とした。区別が必要な場合は、書名に各々「所作付」、「能目録」を加えて示す。

〔第一冊・所作付〕

139 cm × 149 cm。袋綴。栗色表紙。左上の薄黄色題簽に「あい之本」と墨書。虫損があり、全体を補修する。表紙と題名は補修後のもの。原題無し。料紙は斐楮交漉紙。墨付五十四丁。片面九行書が基本だが、行数は八〜十二行まで幅がある。初丁下に「鴻山文庫」の印。

終丁下に「康章書画」の朱印。本文は漢字交じり平仮名書き。補筆は墨書で、本文と同筆。

七十二曲を所収。冒頭（二丁オウ）に三十八番の曲名を目録風に列記するが（うち一番は抹消）、目録と本文の対応関係には乱れがある。すなわち、目録の曲はすべて本文にあるが、逆に本文があるのに目録に記載しない曲が半数近くあること、目録冒頭（芦刈）〜（頼政）は本文の順番と一致せず、（三輪）以降の順番は本文の順番と一致することなどである。また、（竹生鳥）と（実盛）の二番は、重複して記事がある。

内容の大半は、アシライ間を主体とする間狂言型付である。ただし、冒頭の「かも」は「田植」（替間「御田」）の詞章、「八嶋かたり」（本文では「けんさい八嶋」）は「那須与一語」の詞章である。各曲の型付は、書式・記述内容ともにきちんと整理されたものではなく、精粗が大きい。たとえば、（烏帽子折）の「ヤジリ切り」のような長大・詳細な記事がある一方、「老松 よひ出」、「ゆみ八幡 まつしや」など、舞台に出る形式や衣装だけを記述した簡略な条もある。書式は、上を五字分ほどあけて曲名を書き、行を改めたのち、セリフを適宜引用しながら間の所作を経過に沿って記入する。曲名下に扮装などを注記することもある。また、終曲まで記述してから、前に戻って追記することもある。曲の変わり目は二行ほどあける。

〈黒塚〉に「よの本にもあり」と注するところから、類似の間狂言伝書が他に存在した如くであるが、「能目録」がそれに相当するわけではなく、他本の存在は知られない。また、流派は不明ながら、

〈道成寺〉は下掛りの型、〈自然居士〉は上・下の型を対比させながら記述する。

江戸中期以降に書かれた各種の「型付」のように整った形式をとっていないことは、本書が草稿の類だった可能性を示唆すると同時に、成立の古さの一端拠ともなる。後代の間狂言伝書のような間に特化した記述に留まらず、対応するワキの動きやセリフにもしばしば言及しており、舞台進行の様子全体が浮かぶ利点がある。内容的にみても、本舞台の名称がまだ確定していない状況が察せられ、「橋掛かり大目ほど」などと表現する。一方、〈加茂〉の「ほのかくをまふ」など述語化している表現もあり、それらが現行の何に対応するのか、今後の課題である。現在とは異なる演出や古風な演出が記述されているのも、本書の特色であり、貴重な点である。次節に一端を述べるように、〈烏帽子折〉の触レが「竹馬」に乗って出る、〈皇帝〉の狂言口開けに独自のセリフがある、〈殺生石〉で笑いを取るセリフがあるなどで、これらを解明していくことよって、江戸初期の間狂言研究が大いに進展することが期待される。

〔第二冊・能目録〕

135 cm × 138 cm。仮綴、共表紙。斐楳交漉紙。虫損あり。未補修。全六丁。墨付五丁。奥書ナシ。

六十五番の能曲名を目錄風に記す。うち、五十八番の曲名は第一冊と重ならない。〈愛寿忠信・鈴木・兼元・行家〉などの希曲を含む。〈大仏供養〉に「をくにも有」と注記するが、その痕跡はない。

解題の最後に、枳形本「あいの本」にみられる時代の古い演出とおぼしき記述をいくつか補足として取り上げたい。

時代の古さを示す演出として、たとえば、〈烏帽子折〉に、最初に登場する触レ・六波羅の早打が、源義経を討ち取れと諸国へ触れる際に「竹馬」に乗って登場し、アイ（盗賊たち）が、家尻切（強盗のため家屋・蔵を破壊）をする写実的な演技をすることが挙げられる（注1）。アイは、「いろ／＼なずきん」をかぶり「ぬす人のなりをして」舞台上に登場する。家尻切の眼目は、くじり（孔をあけるのに用いる錐の一種）、引敷（腰当・尻皮、のこぎり、登り梯子、細引といった盗道具を用いて宿に侵入し、牛若丸らに撃退されるまでを演じることで、笑いをとることだったようだ）。

他にも、〈竹雪〉に「かつらをかけて女にてたち出」とあり、アイ（羅母）が鬘をつけていることが挙げられる。現行曲では〈邯鄲〉のアイにみられる演出だが、かつて〈竹雪〉にも用いられていたことがわかる。

また、作り物の演出では、〈七騎落〉では現行一艘の舟の作り物を用いるところを、当史料では二艘を出していることと解釈できること、〈放下僧〉で舟の作り物を出していることなどが挙げられる（注2）。〈橋弁慶〉はアイが「つるめそ（最下級の神人。犬神人）」で、現行の替間「弦師」にあたる（注3）。左に掲出する。

きよ（う）けんし二人あひしらい、たいこうちのまへにいる。
①しやうそくはつきん水衣きて、水をけをわいかげにして、は

しり出る。へんまわる。ふたいの中ほとにてこける。あとのあひしらいはなになりと(、)きのこけたる物をひきたていろくゆふてのく也。②二人してはやつ、みにて出る。いかにもきもをつふいて出る。扱後に「やれ、をれもつれていてくれ。やれく」とゆふてはいるもあり。(以下、引用の番号・傍線は私に付す)

傍線①で示したようにアイは頭巾・水衣の装束に、水桶をわいかけにする。『七十一番職人歌合』で「つるうり」が、黒漆塗笠をかぶり、覆面し、脇に弦を入れた桶が描かれていることから、本曲のアイも実際の弦師に似た装束にしていることがわかる(注4)。アイ二人のやり取りは簡略な記述だが、五条大橋で牛若丸が人を斬るさまを見たアイ二人が「きもをつふいて」登場し、一人が転び、もう一人がその転んだ物について語ることで、二人が怖がる様子をユーモラスに演じることに眼目がある。なお、川島朋子氏は早打アイとして登場するのを「かなり後になって作られたと考えてよい」として江戸末期と推定しているが、傍線②で示したように、当史料でアイが「はやつ、み」で登場することから、元来の演出と考えてよいだろう(注5)。

アイがユーモラスなセリフ・演技をする演出は、(藤戸)「殺生石」にもみられる。(藤戸)ではアイ(佐々木盛綱の下人)が、前シテ(漁師の母親)を送り届けた後、管弦講の酒宴で「大さかつきを以、五はいも十はいもくたされて舟そこにとつてねまらして、いひきのやくを仕ましやう」と、自らイビキをかこうというセリフがある。同

様の文句は「真享松井本」にもみられる(注6)。

(殺生石)のアイ(能力)が、飛ぶ雁が地面に落ちたとワキ(玄翁)に報告する場面で、「あれを以て参まして、ばんのおひじのおしる(晩のお非時のお汁)にいたす(ママ)ましやう」とおかしみのあるセリフを言う場合も、物語の展開から逸れて「笑い」をとろうとしている点で、(藤戸)と同様である(注7)。いずれもセリフ・演出に流動性があった時代の傾向を反映するもので、現在よりもアイの演技によって笑いをとっていたことを窺わせる。

(檀風)には目を引く記述がある。次に全文を掲出する。

たんふう わきに太刀あり。しかいをよくかくす也
たちをもちて「いつの扱」。僧よひいたす。わきへとりつきい
ろくする。僧か人をあやめのく。其後

(檀風)の記述は途中で切れている可能性がある。現行宝生流の展開では、梅若が父の仇・本間三郎を帥の阿闍梨とともに殺害するが、当史料には「僧か人をあやめのく」として梅若について言及がない。傍線で示したように、アイ(太刀持)が本間三郎の死骸を隠す演出がある。本曲は、父子の情愛、日野資朝の刑死、梅若の仇討ちといった緊迫感のある展開が続く劇能だが、そのなかにアイが本間三郎の死骸をどのように隠すか思案する演技が見どころの一つにあったのかもしれないと想像が膨らませられる。

死体を表す演出には「反魂香」がある。「反魂香」は、娘が客死したことを知った父が、死者の姿を蘇らせる反魂香を焚くことで、娘の亡霊と再会するという筋立ての番外曲だ。本文を掲げる。

①「つくり物ふたいのさきな中にをく。大夫いて、「やとかる」と言て、いしやへゆいつく也。後にしさいの事をゆい付る。②はしめにふ(た)いに小袖有。いろくかたりをゆうてから小袖を(い)たきて、いかにをもたそうにいたきてはいる。「しがいをおくり申候」と言てから、わき「③かうはんを出せ」と言。「心得て候」とゆうてのく。内よりかうはんもつていつる。ふたいの中ほとにをく。大夫とよくゆいやわせする也。アイ(能)が、傍線①「つくり物」を出し、傍線③「かうはん(香盤)」を置くという記述から、本曲では作り物で父娘が泊まる宿を表し、反魂香を焚く場面で香盤の小道具を用いることがわかる。目を引くのは傍線②「はしめにふ(た)いに小袖有」と、娘の遺体を小袖で表す演出である。「小袖を(い)たきて、いかにをもたそうにいたきてはいる」と、アイが小袖を遺体として大事に扱うよう演技することを注意喚起している。死体を小袖で表す現行演出は、前述〈壇風〉で刑死した日野資朝の遺体を帥の阿闍梨が弔う場面でも用いられる。いずれも小袖を用いて、遺体を丁寧に弔う演出が共通する。ただし、江戸初期成立「間拍子舞」には、娘の死体について、「しかくありて、女しする。爰にて笠をく」と、遺体を笠で表すよう指示している(注5)。これは「反魂香」の文献上の初出が草稿本『歌舞髓脳記』(1795年以前成立。原曲名「不逢森」で記載)で、江戸初期には番外曲になったため、実際に舞台上で上演されたかどうかは別として、死体の演出にバリエーションが生まれたためである。

最後に「那須与一語」を挙げる。(矢鳥(八鳥)には、「よ一をかたる時は、わきとよくゆいあわせする。あいのかたり大事で御座る」とし、替間「那須与一語」への言及がある。興味深いのは、当史料には〈現在八嶋〉に注記もなく「那須与一語」を載せ、最後に「馬にのりたる心もちして、かくやへかけはいる也」とあることだ。目次には「現在八島」にあたる箇所「八嶋かたり」とあるため、当史料の筆者は「現在八島」の間を「八嶋かたり」と認識していた。さらに、〈熊手判官〉にも「此間にはなすの与一をかたるへし」とあることから、〈矢鳥〉の替間としてだけでなく、〈現在八嶋〉(熊手判官)の間狂言として「那須与一語」が用いられていたことがわかる。(熊手判官)の別名が〈現在八嶋〉だった可能性を含めて、「那須与一語」がどのように用いられていたのか、今後の課題としたい。

(注1) 田口和夫「間狂言小論 四(烏帽子折)の家尻切」(『能・狂言研究』三弥井書店、1997)

(注2) 小田幸子「能の舞台装置 作り物の歴史的考察(下)」(『能楽研究』13号、1988)、小田幸子『放下僧』演出史」(『能楽資料センター紀要』6号、1983)

(注3) 現在、「弦師」は和泉流の替間だが、〈夜討曾我〉の大蔵流の替間「大藤内」の大筋は同じである。

(注4) 新日本古典文学大系「七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集」(岩波書店、1993)。法政大学能楽研究所蔵「和

泉流間狂言伝書』（天保十五年1844）『識語』「橋弁慶ツルシ」には「白キ布ニテアタマヲ包ム。ヒタイヲ包又フク面ノヤウニ目ヨリ下ヘモマワシ、結ヒ留テ、下ヘ廻タル布ヲヒタイエ打上ル」とある。

(注5) 川島朋子「〈橋弁慶〉の替間「弦師」とその周辺」(『国語国文』68—1号、1999)

(注6) 能楽資料集成『貞享年間大藏流間狂言本二種』田口和夫校訂、わんや書店、1986

(注7) 小田幸子「アイ狂言の「笑い」(『鏡仙』378号、1990)

(注8) 小田幸子「資料紹介『間拍子舞』の翻刻と解題」『芸能の科学』29号、2002